



Title	<書評>藤居岳人著『懐徳堂儒学の研究』
Author(s)	寺門, 日出男
Citation	懐徳堂研究. 2022, 13, p. 75-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評 藤居岳人著『懷徳堂儒学の研究』

寺 門 日 出 男

はじめに

「あとがき」によれば、本書は著者が長年にわたって公表した論考に加筆訂正等を加えて再構成し、大阪大学大学院文学研究科に提出して令和元年五月に博士(文学)学位を授与された論文をもとに、加筆・修正を加えたものであるという。

懷徳堂についての著者の業績は、平成五年に発表された「中井履軒撰『莊子雕題』諸本について」(『中国研究集刊』辰号)に始まる。⁽¹⁾当初は履軒の『莊子』注釈に關するものを主に業績を積み重ねていたが、平成十六年に「中井履軒『論語』注釈書研究史」(『阿南工業高等専門学校研究紀要』第四十号)を発表して以降、履軒の『論語』注釈(『論語雕題』・『論語逢原』)の研究へと転じ、

やがて履軒と仁斎・徂徠との比較研究、さらには中井竹山、五井蘭洲、尾藤二洲等の研究等へと展開していった。また、この間、国内外の学会・研究会等において研究発表を行い、『懷徳堂事典』(湯浅邦弘編著、大阪大学出版会)の執筆も分担している。本書は著者の約十五年に及ぶ、これら一連の懷徳堂儒学研究の総括といつてよいだろう。

著者はかつて大阪大学文学部および大学院文学研究科において中国哲学研究室に所属し、卒業論文では後漢の思想家・王充を、修士論文では『淮南子』を扱っていた。大学院修了後も中国思想史を研究していたが、その傍ら上述のように懷徳堂研究に着手し継続してきたのは、平成十二年に設立された懷徳堂研究会に所属したことが、大きな要因であるという(「あとがき」)。

まずは本書を論評する前提として、懷徳堂研究会設立

以前の懷徳堂研究および近世日本思想研究における問題点について、略説しておきたい。

一

① 朱子学・懷徳堂の評価

懷徳堂は享保九年に設立され、二年後には官許を受け、その後明治二年に至るまで百四十余年の間存続した。江戸時代の儒学を語る上では決して看過できない存在である。京・大坂はもちろん、中国・四国・九州諸国の儒者達と交流していた。懷徳堂という学問所は、間違いなく西日本における知的ネットワークの一大拠点であった。とりわけ、その黄金期を支えた中井竹山・履軒兄弟は、「確実に日本近世後期の思想史の中心的人物」であったと評される^②。

しかし、懷徳堂および懷徳堂学派の儒者達は、不幸にして忘れられてきた。高校の倫理教科書でも、日本の朱子学について記述があるのは、藤原惺窩・林羅山・山崎闇斎程度に限られ、竹山・履軒について述べるものはない。何故か。それは従来の日本思想史研究において、懷徳堂の儒者達がほとんど省みられなかったからである。

江戸時代の儒学史についての研究は、井上哲次郎によ

る三部作―『日本陽明学派之哲学』(明治二十三年刊)・『日本古学派之哲学』(同三十五年刊)・『日本朱子学派之哲学』(同三十八年刊)―に始まる。しかし、『日本朱子学派之哲学』の目次に懷徳堂の儒者の名は一切なく、わずかに巻末附録「朱子学派生卒年表」に、竹山の名があるのみである^③。

そもそも井上哲次郎の研究が、江戸時代に本流であった朱子学からではなく、なぜ陽明学派から書き起こされたかを考えるならば、井上の関心が近世思想の中で近代につながるものは何かという点にあったからである。江戸時代、陽明学は封建制を揺るがす危険な思想と考える者が多く、実際に討幕運動で活躍した人物の中に陽明学を学ぶ者―大塩平八郎・西郷隆盛・吉田松陰等―が少なくなかった。陽明学の次に『日本古学派之哲学』を執筆したのは、儒学としての古学が中国伝来のものではなく、日本独自の儒学であったためと考えられる。それに対し、朱子学は封建体制を支える柱であったと考えられ、後回しにされたのである。

懷徳堂についていえば、その中心ともいえる中井竹山は朱子学派であるばかりではなく、「幕府的立場に立つ人」^④「松平定信の経済顧問」(竹内誠『寛政改革の研究』、平成二十一年七月、吉川弘文館)と考えられていたため、

近代にはつながらない思想、つまりは評価に値しない存在と考えられたのであろう。

こうした朱子学の否定と懷徳堂の存在を軽視する風潮とは、その後も継続していく。丸山真男『日本政治思想史研究』（昭和二十七年刊）は、社会科学研究者の間では、今なお名著として高く評価されている書である。丸山は江戸時代における儒学について、近世初期の思想界をほとんど独占していた朱子学が、荻生徂徠らの批判などによって次第に解体していったと捉える。そして、朱子学の解体の過程を通じて、近代意識が徐々に芽生えていったという。丸山は、荻生徂徠の古文辞学を近世儒学最後の高峰であると高く評価する。だが、懷徳堂については、資料に基づいて検討しているとは、到底考えられない。

丸山の思想史観は、その後大きく影響する。そのため、日本思想史研究においても、江戸の思想の中から近代の萌芽となるものを見出して評価するという傾向が強くなる。江戸思想の本流であった朱子学は、ほとんど顧みられることがなかった。懷徳堂の場合、山片蟠桃『夢の代』における実証的合理主義は評価されるが、その思想を生み出した背景―蟠桃の師、竹山・履軒―にまで考察が及ぶことは、ほとんどなかった。

こうした近代主義的研究が、思想史研究としてはな

だ問題があることは、明らかである。その反省としてポストモダンの視座からの研究も、昭和末〜平成初にかけて登場する。しかし、依然として仁斎・徂徠および本居宣長等が主たる研究対象で、懷徳堂を含めた朱子学が、組上に載せられることは稀であった。

② 研究環境の未整備

近世日本思想史の分野は、いわゆる境界領域である。江戸時代の儒者達は、儒学はもとより、仏教・神道・国学等についての広汎な知識を有し、漢詩の贈答を行い、崩し字によって書簡・文書を記述し、読解していた。かつての日野龍夫・前田愛のような万能型の研究者ならばともかく、現代のように研究領域が細分化してしまった状況で、研究者が江戸期の儒者と同様のスキル全てを獲得することは、極めて困難である。

その結果、訳注付きの全集刊行、蔵書目録作成、書誌情報の公開等、研究を行うための環境整備が、滞っているといえる。河出書房は『荻生徂徠全集』出版を計画し、昭和四十八年から逐次刊行をはじめた。しかし、原文（漢文）を読み誤っているものが少なくなかった。吉川幸次郎はその誤りのいくつかを例示した上で、「それが生まれした経過を考えるのに、仁斎なり徂徠が資料とした中国

書に、研究者が熟しないことに起因するものが、大多数と思われる」(岩波書店『仁斎・徂徠・宣長』序、昭和五十年)と指摘している。当該箇所⁵の訳注を、中国書に習熟しない日本思想史および日本史の専門家が担当したことに原因があると思われる。一般に、漢文は典故を多用して書かれるため、語句の意味を調べただけでは、正確な理解は困難なのである。吉川からこのような指摘を受けたことに因るものか否か、以後、同全集の刊行は頓挫し、今なお未完のままである。みずず書房からも、河出書房版と同じ昭和四十八年から『荻生徂徠全集』の刊行が始まった。こちらは、主に中国哲学・中国史学の研究者による分担執筆であり、吉川の指摘するような初歩的な誤りは、(筆者が利用した範囲では)見あたらない。しかし、こちらも昭和六十二年に七冊目が刊行されたのを最後に、途絶えてしまっている。その理由は未詳だが、中国学研究者だけで全ての資料を処理するのは、やはり困難であつたろうと思われる。徂徠と並んで最も盛んに研究されている伊藤仁斎についても、全集の刊行が企画されているという話は、寡聞にして知らない。

③ 経学研究の遅れ

儒者が著した中国古典に対する注釈が、従来あまり取

り上げられてこなかったことも指摘しておかなければならない。仁斎を例に説明すれば、『語孟字義』(若年寄・稲葉正休に書き与えた書)・『童子問』(師弟の問答形式で著された書)等、比較的読解が容易な文献は頻繁に取り上げられるものの、『論語古義』・『孟子古義』の注釈を一々取り上げて論ずる研究は少ない。徂徠についても同様で、『護園隨筆』・『弁道』・『弁名』等を用いての研究業績は多数存在するが、『論語微』における『論語』⁶の解釈から、徂徠の思想を論じる例は少ない。

そもそも、従来の日本思想研究者達が経書の注釈読解に積極的でなかったのは、それを読む必要を感じていなかったためかもしれない。だが、それは経学というものについて理解が不十分なことによる。

儒教の經典は簡略で中性的な記述のものが多く、『論語』を例にとれば、一つの章が十字前後の短いものが多数あり、しかもその言葉が何時、どのような状況で、誰に向かつて語られたものなのか、大抵の場合一切説明がない。そのため、注釈者の思想的立場によって如何様にも解釈できる場合が少なくない。『論語』子罕篇第一章⁶を例に説明する。朱子の『論語集注』では、「子罕^{まれば}に利と命と仁とを言ふ(先生は利益と天命と仁とについては、滅多に口にされなかった。)」と読んでいた。この読みか

ら、孔子は利を生む商業活動に対して否定的であったと考えられてきた。それに対し、荻生徂徠『論語徴』では、「子罕に利を言ふ。命と与（とも）にし、仁と与にす（先生は利について口にされることは少なかった。口にされる場合でも、天命にとつての利、仁にとつての利という時に限られた。）」という新解釈を提示した。商人が暴利を貪ることは悪であるが、正当な商業活動は社会にとって有益であり、むしろ積極的に肯定するべきだと徂徠が考えていたため、こうした解釈が生まれたのである。

このように経書の注釈とは、決して辞書的な説明にとどまるだけのものではない。注釈を施すという形を借りながら、そこに自己の思想を盛り込むのが経学である。經典に注釈を施すことは、政治に携わることには劣らず、もっとも重要な行為であったといえる。

④ 懷徳堂研究会の発足

明治四十三年、西村天因等の尽力によって、懷徳堂記念会が設立され、やがて重建懷徳堂が開校する（大正五年）。昭和二十年の大阪空襲で校舎は焼失したが、書庫は焼失を免れ、その蔵書は大阪大学に引き継がれて懷徳堂文庫と命名される。昭和五十一年には、『懷徳堂文庫図書目録』が刊行された。しかし、同目録は重建懷徳堂

から受け入れた書籍に限られており、書画・器物類や後に受け入れられた中井家関係資料（新田文庫）等については収載されていなかった。

平成十二年、大阪大学中国哲学研究室の関係者を中心に、懷徳堂研究会が設立された。当初は大阪大学創立七十周年記念事業の一環として、懷徳堂関係のデジタルコンテンツ作成を目的として限定的に始められたものであった。しかし、懷徳堂文庫に収められている膨大な資料が、どういう資料なのかさえも不明なものが少なくないこと、そのため、それらが十分には研究に活用されてこなかったことが明らかになった。

そこで、記念事業終了後も継続して研究会・シンポジウムを開催する等、活動を続けることとなった。会員連は大学および大学院での演習を通じて漢籍の読解に習熟しており、その特長を生かした研究成果が陸續と発表されている。国内外の学会等においても研究発表を行い、懷徳堂の再評価に多大な貢献をしている。

研究会会員の業績に触発されたためか、近年では研究会と全く関わりのない研究者達によって、懷徳堂学派の研究が行われるようになった。また、中国学の学会においても日本儒教および日本漢文に対する関心が高まり、日本中国学会の全国学術大会においても、従来の哲学部

会・文学語学部に加えて、平成二十二年以降は日本漢文部会が増設されるにいたった。もちろん、このことは全国的に外国人留學生が増加し、彼らの多くが日本漢文を研究対象に選んだこと等、様々な要因が考えられるが、懷徳堂研究会の活動実績がいささかでも関係していると考えている。

二一

以上の略説を踏まえ、次章以降において、著者の著書について論評していきたい。まず、目次によって本書全体の構成を掲げる。

序章 問題の設定と本書の構成

第一部 江戸時代の儒者と寛政の改革

第一章 儒者と知識人 — 懷徳堂の儒者を例にして —

第二章 儒者と寛政改革

第二部 中井竹山・履軒兄弟の周囲の儒者 — その朱

子学的立場 —

第一章 含翠堂の儒学と初期懷徳堂の儒学

第二章 五井蘭洲の儒学

第三章 後期朱子学派の儒学 — 尾藤二洲・頼春水を

中心に —

第三部 最盛期懷徳堂における経学研究 — 中井竹

山・履軒の経学研究 —

第一章 中井竹山の経学研究 — 『四書断』を手が

りとして —

第二章 中井履軒の性説1 — その朱子学批判の立

場 —

第三章 中井履軒の性説2 — 性と気稟 —

第四章 中井履軒の儒学的聖人観1 — 伝統的儒学の

立場に沿った理想像 —

第五章 中井履軒の儒学的聖人観2 — 道を学ぶ者の

理想像 —

第四部 最盛期懷徳堂儒学の経世思想 — 中井竹山・

履軒の実学思想 —

第一章 現実に対する懷徳堂儒学の見解と中井竹山

の儒者意識

第二章 中井竹山がめざしたもの

終章 懷徳堂儒学 of 思想史的意義とその後の展開

本書は、懷徳堂の儒学、特に中井竹山・中井履軒の朱子学の特質を明らかにすることを目的としたものである。従来、懷徳堂といえは「鶴学問」と評され、諸家の

いいところ取りをした折衷学と評されてきた。しかし、懷徳堂の学風が時代によって同じものなのか否かという点について、十分な検討はされてこなかった。

第一部第一章では、従来の研究において「儒者」・「知識人」の語が意味の曖昧なまま用いられていることを指摘し、考察を進める前提として「知識人」の語の意味を分析している。たしかに、近年の研究においては江戸時代の儒者について、「儒者」ではなく、「知識人」の語が用いられることが少なくない。おそらくこれは、近世儒学の中から近代の萌芽となるものを見出そうとする場合、「儒者」という古めかしい語を用いることに抵抗があったためではないか。著者のこの指摘は、従来の研究の盲点を鋭く突いたものといえる。

第一部第二章では、朱子学を受容した江戸時代における儒者の存在様態について、中国宋代以降の儒者との比較しながら検討した上で、寛政の改革を契機として日本の儒者の在り方が大きく変容したとしている。すなわち以前の儒者は社会的地位が低く、現実の政治とは縁遠い存在であったが、寛政の改革を契機として政治に参画できるようになり、本来の意味での儒者に変容していったと述べる。著者の見解は、先行研究を踏まえた上での議論ではあるが、果たして寛政異学の禁が儒者の在り方に

ついてそこまで劇的な変化をもたらしたのか、意見の分かれるところであろう。例えば竹山の場合、寛政異学の禁が出される十六年前に、経済政策の上申書『社倉私議』を著して龍野藩に呈上している。このことは、竹山が寛政の改革以前の段階から「治人」に関心を持っていた可能性を示しているのではないか。今後更なる検討が必要であろう。また、寛政異学の禁について「武断政治から文治政治へ転換するために行われた一連のシステム化の動きだと考える方がよい」(第一部第二章)と述べているが、この説明はどうか。通常、武断政治とは三代将軍家光までの政治を、文治政治とは四代家綱以降の政治を指す。寛政の改革において用いるべき語ではないと思われる。

第二部第一章では、竹山・履軒の儒学の性格を分析する前提として、懷徳堂成立前に大坂平野郷にあった含翠堂および初期懷徳堂の儒学について考察し、次いで第二章で竹山・履軒の師であった五井蘭洲に及んでいる。当初は折衷学的性格であった学風を、蘭洲が朱子学一尊へと変化させていったと述べる。第三章では後期朱子学派の儒者である尾藤二洲・頼春水の儒学について考察し、竹山・履軒との相違について考察している。従来の懷徳堂研究において、古くは西村天囚『懷徳堂考』以来、懷

徳堂の学風の変化について言及があり、五井蘭洲の儒学についても、陶徳民『懷徳堂朱子学の研究』⁷⁾という優れた研究がある。しかし、本書のように歴史的推移についての考察や、同時代の朱子学派との詳細な比較研究は、これまであまり見られないものである。本書の特長の一つと云っていいだろう。

本書の中心は、竹山・履軒の思想について考察している第三部・第四部である。特に第三部は、頁数で全書の約三分の一が充てられており、本書の核心部分といってよいだろう。先に述べたとおり、従来の日本思想史研究では、経書注釈についての検討がなおざりにされていた。著者は竹山の四書注釈（『四書断』）および履軒の『論語逢原』・『孟子逢原』を主たる対象として読み込み、竹山は是々非々の立場で『四書集註』に対していること、履軒も朱子に対して一見厳しく批判している面もあるけれども、基本的には朱子学的立場にあるということを述べている。履軒についての論証が詳細であるのに対し、竹山がやや手薄にも見えるが、残された注釈の量は断然履軒のものが多いこともあって、やむを得ないであろう。竹山・履軒に対して、本書以上に丹念な分析をおこなったものは、管見の限り見当たらない。本研究における最大の成果と云っていいだろう。

第四部では、竹山・履軒の経世思想について考察している。彼ら兄弟の儒学は、現実を見据えつつ、「修己」「治世」のバランスを重視する、本来の朱子学に通ずるものであり、それが彼らの経世思想に反映していたことを述べている。著者の論ずるところは大筋では首肯できる。ただ、「履軒は経世面においてみずからの能力を発揮したいという希望があつたのではなからうか」（第一章）という推論は、刺激的なものではあるが、説得力を持たせるには、更なる検討が必要であろう。履軒が三十代半ばで「幽人」と号し、その後は隠者同然の生き方を貫いたという事実をどう説明するかが、今後の課題である。また、竹山が京都に学問所設立するよう働きかけたことから、「政治的方面よりもむしろ道徳教化」を重視していたとしている（第二章）が、これは宝暦事件に危機感を抱いた政治的性情を持つもので、頼春水が広島藩学問所設立に貢献したことと等と、同列には論じられないのではなからうか。

終章では、さらに懷徳堂儒学が幕末期に及ぼした影響にまで論及し、全体として懷徳堂学派儒学の思想史的意義について説明を試みている。欲を言えば、「懷徳堂儒学」と題する以上、中井蕉園や並河寒泉といった後期懷徳堂の儒者にも言及してほしかった。

三二

以上、本書の概略を述べつつ、長所短所について私見を述べてきたが、最後に全体を通しての疑問・要望について述べておきたい。

まず、資料の引用の仕方について指摘したい。『論語逢原』・『孟子逢原』・『草茅危言』等、多くの資料の自筆本が残されている以上、それらに拠るべきではないのか。中国古典研究者は版本による研究に慣れ、そのことあまり疑問を持たない。なぜなら、中国の文献は、一部の例外（出土資料や近代のものなど）を除いて、版本しか残っていないからである。だが、原書のあるものについては、それを積極的に活用するべきである。

既に述べたように、本書の最大の特長が、經典注釈を丹念に読み込んだ上で竹山・履軒の思想を解明している点にある。ただし、こうした実証主義的な方法論だけでは、捕捉しきれない面もあるのではないか。

例えば、竹山が徂徠に対し激烈な人格攻撃を行ったことは、よく知られている。しかし、竹山が最も忌み嫌っていたのは、古文辞学派ではなく、崎門学派である。古義学に対する態度は更に穏やかで、懷徳堂の歴代学主は古

義堂の儒者と漢詩文の贈答を行っている。また、伊藤東涯に対して懷徳堂へ出講を依頼する等、むしろ親しく交流していたといえる。

では何故、徂徠だけを目の敵にしていたのか。中野三敏は、徂徠学に対する反攻を主導した古賀精里（肥前）・尾藤二洲（伊予）・柴野栗山（阿波）の三人をはじめ、頼春水（安芸）、中井竹山・履軒、那波魯堂（播磨）等、主な反徂徠の儒者がいずれも西国出身者であったことから、関東に対する関西勢の反攻という面があったとすら^⑧。無論、徂徠の学問が西国儒者達にとって衝撃的だったからこそ、その反発も大きかったのであろう。東京に対する大阪の対抗意識は今なお残るが、その点を併せて考えれば、竹山の反徂徠も腑に落ちる。

また、竹山が松平定信に献上した『草茅危言』は、「危言」と称しながらも、幕府の施策をあらかじめ論難することはしない。そのため同書を読む限り、竹山と定信の政治に対する考え方は近かったとも考えられる。そのため日本史研究者の間では、竹山を定信の政治顧問と位置づける者が少なくない。しかし、同書は定信が読むことを意識して書かれたものであり、当然遠慮せざるを得なかったはずで、竹山の本音が、はばかることなく語られているとは限らない。

研究者にとつては厄介な問題だが、日本思想史研究は多くの資料が残されているため、中国哲学史研究の方法論だけでは説明できないものがある。文字面には現れない社会的背景や儒者の心情等、様々な角度からの検討によって、解明されることがまだまだ残されていると考える。

以上、疑問・課題について述べてきたが、本書が懷徳堂研究はもとより、近世日本思想史研究において、新たな地平を開拓したものであることは疑いない。今後の更なる展開に期待したい。

(大阪大学出版会 二〇二〇年七月 三八四頁

本体価格六、一〇〇円)

注

(1) 著者の懷徳堂関連の研究業績については、懷徳堂研究会ホームページ (<https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/>) で公開されているものを参照した。

(2) 加地伸行他著『中井竹山・中井履軒』序、昭和五十五年、明徳出版社。

(3) 教科書本文ではないが、懷徳堂について触れている倫理教科書もある。例えば実教出版『高校倫理』では、「儒学者の系譜」中、朱子学で「懷徳堂 中井竹山・中井履軒」の名が

挙げられている。また、懷徳堂で学んだ人物として、富永伸基の加上説や山片蟠桃の合理主義思想について取り上げる教科書もある。

(4) 懷徳堂の儒者で項目が立てられているのは、『日本陽明学派之哲学』第二篇第三章に三宅石庵の名があるのみである。

(5) 同書で懷徳堂について触れている箇所は、わずかに以下の二箇所のみ。中井履軒・山片蟠桃等、他の人物には全く言及していない。

① 直接徂徠学の攻撃をテーマとした著書だけでも：(中略)：五井蘭洲「非物篇」等々、実に三十余种を数へるに至ったのである。：(中略)：しかし、これらのおびただしい反駁書も理論的には殆んど言ふに足るものはない。た。(新装版百四十二頁)

② 朱子学にしたところでも：(中略)：到底近世初期のごとき純粹な朱子学のままにとどまりえなかつたのである。このことは、その頃不振の朱子学派のうちに独り気を吐いてゐた懷徳堂一派の学風と、まさに古学派の批判の対象となつた朱子学派のそれを比較するだけで明かであらう。その第一代の学主となつた三宅石菴はその学説の折衷性の故に「鶴学問」と評せられた。宋学の一大敵手たるべき仁斎の子、伊藤東涯もそこに招かれて講義をした。四代の学主、中井竹山は反徂徠学の主要文献の一

たる「非徴」の著者であるが、彼は他方山崎闇斎の偏狭
固陋を攻撃して止まらなかった。また懷徳堂では一般に經
学に偏重せず、詩文が尊重された。(同百四十六頁)

(6) 原文は「子罕言利与命与仁」。

(7) 『懷徳堂朱子学の研究』(平成六年、大阪大学出版会)では、
五井蘭洲の学問と思想を中心に考察し、その学風が朱子学的
な性格を有しており、竹山・履軒以降の懷徳堂学派に多大な
影響を与えたと論じている。

(8) 「上中納言菅公公建学私議」に、「尤^{もつと}忌避玉フベキ學術八山
崎ノ一派ニゴザ候」(『竹山国字牘』)と述べられている。

(9) 『十八世紀の江戸文芸』(平成十一年、岩波書店)